

「考えの小窓」 「研究」小考 ①

「研究は美術館諸活動のコア（核）である」などといったら、「何をいまさら」と白けた顔をされるかもしれない。でも、やはりそうなのである。「研究」と聞けばすぐ、「紀要」の論文とか、展覧会カタログのテキスト、研究大会での発表などを連想するであろうが、美術館にとってそれだけが研究の成果としてあつかわれるのではない。調査・研究なくして、その美術館の体系的な収集は成り立たず、また、この研究と収集・保存の2要素が芯となってこそ、その成果を展示を中心とした教育普及というかたちによって、社会に還元することが可能となる。つまり、日頃の美術館の諸活動すべてに研究の成果はあらわれる、といっても過言ではないのである。

ところで、この「研究」をめぐる、同じ「博物館」でありながら設立の趣旨が大きく異なる事例がある。国立民族学博物館（民博）である。ここは研究を主体とした博物館である。と、いうよりも、国立大学共同利用機関に位置づけられた国立の大型研究所群のひとつである、といったほうが判りよい。いや、もっと判りやすくいえば、市民への知的サービス機能をあわせ

もった研究機関である。学芸員といった職種はなく、大学ではないのになぜか教授、助教授、助手といった教官制である。彼らの第一任務は、いうまでもなく研究である。研究テーマは民族学、文化人類学に関するものであれば自由。美術館でいえば、美学、美術史にあたるが博物館学はない。そして、審査があるとはいえ、個々が希望する研究テーマは毎年予算化される。設備も十分に整っている。教官ではあるが、大学の教官とはちがいが講義の義務はない。「学部は労働者、研究所は貴族」とやっかまれるように、毎日を好きな研究に没頭できるとは、だれが目からみてもうらやましい限りである。「金もなく、なによりも時間がない我々とは雲泥の差だ」と皆さんは思われるだろう。

しかし、実情はそれほど甘くない、と同館々長、梅平忠夫氏はその著書「研究経営論」のなかでいっている。それによると、少々の研究実績があがったところで、恵まれた環境のなかにあってそれはあたりまえ、ましてや実績がうまれてこないともなると、いつたい何をやっているのだ、と強烈な批判の声が周囲からあがってくるのである。「とくに、比較的わかい教官諸君に要望する。わき目もふらずに勉強せよ」という氏の言葉には、激励の域をはるかに越えた厳しい響きがある。どこの世界もはたでみるほど甘くはないのだ。（鈴木正実）

▼知事の公約「新しい北海道の創造」のなかには道立美術館に関連した内容がある。①写真芸術など特色ある美術館の設置②基金方式の導入による収蔵作品の計画的充実③ハイビジョンの活用や海外の美術館との姉妹提携などによる内外のネットワークの強化④親と子が共に音楽や美術を鑑賞する機会の増加や目の見えない人も楽しむことができる「手で見る美術館」の開催など、幼いときから文化に親しめる環境づくりの推進一以上、いずれも大きいプロジェクトばかり

で、実質的な計画の段階から学芸員が専門的事項で関与していくことになる。▼今年度の作品収蔵費が昨年度比2千万増の1億5千万円となった。帯広美術館分を引くと実質1千万円の増額となる。▼釧路市教育委員会社会教育センターの村山史歩学芸員がこの7月1日から12月末までの6ヶ月間、近代美術館で長期実務研修をおこなうこととなった。▼かねてからの懸案であった旭川美術館の常設展示室の設計費が計上された。来年度中に開設の予定。

談輪 〈白いキャンバス〉

周知のように「道美学芸研」が昨年暮れに発足した。発足して間もないとはいえ、具体的な活動実績はまだ何もないのはいささかさびしい。とにかくできることから手をつけていかなくては、という気持ちから、このたびの会報発刊とあいなつた。このコラムのタイトルは「談輪」と書いて「だんわ」と読むのだそうだ。会報編集にあたる鈴木参事の言である。要は、美術館人による美術館を考えるリレーエッセイ、と私はとらえている。そこで一言。この会報自体が今まさに始まったばかりで、その意味では「

心境・近況

□4月帯広美術館に着任して、はや3ヶ月が過ぎ去ろうとしています。緑ヶ岡公園の中、少人数の職場で、アットホームな雰囲気であり、恵まれた環境にあると思います。また、開館へ向けて活気がいっぱいです。私にとって学芸員の仕事は全く未知の世界であるため、本当にとまどうことばかりですが、何もかもすべてが勉強、じっくりと腰をすえて仕事に励みます。今、新たな第一歩を踏み出したばかりです。学芸員として、常に自分の仕事に感動と喜びが持てたら素晴らしいことだと思います。しつかり頑張っ

てゆきますので皆様方よろしくお願い申し上げます。（光岡幸治）

□学芸員になって3ヶ月の心境、というのは、今までそうした感慨にふけるいとまもなかった私にとっては、いささか面食らう言葉である。本当に、この3ヶ月は恐るべきスピードで過ぎていった。休みなく猛烈な勢いで回り続ける美術館の歯車に、必死でしがみついていた私である。それにしても、先輩学芸員の方々の強靱な体力と精神力には、ひたすら頭の下がる思いである。同時に、自らの未熟さを思い知らされる日々でもあった。今後は、自分の個性を生かしつつ、常に喜びと充実感をもって仕事ができるようなベースづくりとチームワークを大切にして、微力ながら美術館の発展に寄与したいと思う。（浅川真紀）

白いキャンバス”にたとえていいということだ。どんな絵画につくりあげるかは、これからの描き手しだいなのである。で、ひとつの提案だが、このコラムでもいいし、またそのほか会報のどこでもいいから、21世紀には北海道の美術館はこういうふうになっている、という未来像を、各人が自由にこのキャンバスに描くことにしてはどうだろう。自分たちの未来像を自分達が描く。美術館の世界も、もう他力依存では新たな展望など望むべくもない。会報のイメージは、むしろ楽しく柔かいものであってほしい。が、そのなかにも学芸員としての問題意識の部分は、やはり欠落させたくない、と私は思う。（奥岡茂雄）

□私が学芸員として赴任して、ほぼ3ヶ月がたった。その間、自らの仕事を通じて、また先輩学芸員の仕事を見て、学芸員という職種が如何に多岐にわたる内容を担っているかを実感した。外から見ていても、実習でもとうてい経験できないことばかりで、まさに手探りの状態で過ぎた3ヶ月であつた。私にとって、それは研修期間のようなものであったといえる。もちろん、まだまだ知らないことも多く、このような状態はしばらく続いていくことだろう。これらの経験を今後に生かし、一日でも早く自分が「学芸員である」といえるよう日々の仕事に取り組んでいきたいと考えている。（大下智一）

蛇足無用

□どうにか会報第一号の発行にこぎつけた。慣れぬワープロ編集のくせに蛇に足など付けてる余裕などないが、編集後記ゆえチョット（一寸）だけ。□会報のイメージのみならず、「談輪」欄の趣旨までズバリと指摘してくれた会長にまず感謝！学芸員だけでなく、美術館人であればどなたでも歓迎。美術館を考えるリレーエッセイに一言を。□「美術館の歯車に必死でしがみついて」とは、真に実感のこもった言葉。新人の頃は、だれしも「未知の世界」を「手探り」で歩むが如し。いずれ光明もみえる。□この号への批評を乞う。一寸だけでもいい、それを励みに隔月で発行したい。（#）